

Face masks can foster a false sense of security

(解答・解説)

(60点満点)

問1 (a)waiting (b)エ (c)cheating (2点×3)

(a):「リハビリ治療の順番を待って、」で現在分詞のwaitingが正解。日本語に惑わされ「待たされている」と考え、waitedにしないこと。I'm waited.なんて言い方はしない。

(b):covered by insurance 「保険でカバーされる/保険が適用される」このwithは付帯状況のwith。with everything(=O) covered(=C)

(c):現在分詞か過去分詞のどちらかだが、この文だけでは「ズルした子供/ズルされた子供」のどちらかが分からない。先を読むと、「この子にお仕置きをする」とある。文脈からズルした子供と分かるのでcheatingが正解。

問2 have so many people gone about masked (5点)

Never beforeと否定語が前に来ていることから倒置がおきていると分かる。挿入句を消して元の形に戻すと、

So many people have never gone about masked before.
となる。倒置にさえ気づけば残りは難しくはないはずだ。

go aboutはここでは「出歩く/歩き回る」の意味。

So many masked people gone aboutも考えられるがこれだと仮面舞踏会的なマスクみたいになってしまうし、リズムもよくない。

問3 (例)マスクは、完全にウイルス等を防げるわけではないが②/
我々はつけるだけで安全だと思い込んでしまい、②/
本当は最も危険な場所なのに②/
安全だと感じてしまう病院の待合室と同じように②/
誤った安心感を助長するから。②/ (95字) (10点)

少し推測が必要な問題。下線部は「なぜマスクは病院の待合室のようなものなのだろうか。」という比喻。理由は直後「どちらも誤っ

た安心感を助長するから。」とあるが、これだけでは字数が足りない。そこでマスク、待合室のそれぞれについて具体的な説明を求める。マスクについては前の段落に書かれている。我々はマスクをすることによりウイルスに対抗するがコロナウイルスのようにマスクを通り抜けてしまうものもあり、マスクは役に立たないと言っている(8行目)。それなのに我々の多くはマスクをつければとりあえずは大丈夫だと考えている。待合室に関しては下線部の後に説明されており、病院の待合室こそ三密を満たした最も危険な場所だと書いてある(14行目)。しかし、多くの方は病院はコンサート会場なんかよりは安全だとなんとなく思って、大して重要でない治療を受けようとする。これらを筆者は誤った安心感だと主張している。安心感に関しては本文にあまり明示されておらず、推測が必要なので難しかったかもしれない。

問4 2→4→1→3 (全解4点)

段落作成の問題は指示語や代名詞に注目すると良い。

1,His observations …(←Hisって誰やねん)

3,…suggests another…(←anotherって何に対して「他の」?)

4.That may come closer …(←Thatって何?)

と、これらは代名詞が使われており、2,Consider the mask …の文には代名詞がない。よってこれが最初なのではとまず疑う。そう思って残りを組み立てていくと、次に繋がりそうなのは4That may …の一文。(文化的現象と考えることで本当の意味に迫れる)だとわかる。ここでようやく人物が出てくる。よって次はこの人物を受けて1,His …と繋がる。あとは残った3が最後となる。確認してみると、前の文にある1つ目のタイトルとanotherとがキレイに繋がる。

問5(例)口元を隠そうとすることで、②/ 互いを知り、①/ 感情を理解し合い、①/ 共感をするなどのことができなくなり、①/ 親密な関係が失われていくという意味で②/ 有害だということ。①/ (8点)

下線部「それは他の意味では有害だ」下線部より後ろの53行目から顔を隠すことのデメリットが書いてある。そこをまとめれば良い。

問6(例)インターネット上で、自分自身の情報を隠し責任を逃れた①/ 匿名の人達が、②/ 芸能人などの有名人に対して②/ 大勢でバッシングを行っているということ。②/ (7点)

下線部「マスクをした人たちがマスクをしていない人たちに群がっている」swarmは「群がる」という意味。知らなくても直前の文で雰囲気はつかめるはずだ。内容については2つ前の段落にあるのでここをまとめれば良い。

問7(例)社会が発展し、②/ それに伴い②/ 道徳と呼ばれる行動規範が発展する前は②/ AVPは自由に人間を動かしていた。②/ (8点)

構造は以下の通り

AVP had free rein

—society evolved

before and

—with it,

certain rules of behavior (evolved)

↙called morality

並列を明らかにすると、並列の2つ目に述語動詞がないと気づく。1つ目にあるevolvedが省略されているのだ。

have free reinは「自由に/思いのままに」みたいな意味。reinは馬などの手綱のことで、手綱を放して馬に自由に行かせるというのが語源。音が同じだからか、reinと誤って表記されることもあるので注意。

要するに、社会が整い、道徳なんかが出てくる前はAVPが好き勝手にいて、一人が多くの人と関係を持っていたというわけだ。

問8 ウ (4点)

underpin「～を支える」の意。この単語自体は知らなくても後の文から推測してほしい。

22行目 Marriage underpins society.→結婚は社会をXXXする

同行 Infidelity undermines marriage.→不倫は結婚をだめにする

23行目 Therefore it(=Infidelity) undermines society.

→したがって、不倫は社会をだめにする。

結婚がだめになることにより社会もだめになっていくというわけなので、結婚は社会を維持している/支えているなどと推測できるだろう。

問9 mask (4点)

直前に It's a veil(それはベールだ)と書いており、veilと同様に「覆い隠すもの」を表す単語はmaskしかないので、これが正解。

問10 close confined crowded (全解4点)

三つの「密」とは言わずもがな「密接・密閉・密集」である。コロナウイルスに関することは前半部分に書かれており、前の方を中心に探すと、16行目にちょうど該当する箇所がある。ここが正解。

三密は英訳すると"Three Cs"である。

余談だが、厚労省のHPでは三密("Three Cs")を

- ・ Closed spaces with insufficient ventilation
- ・ Crowded conditions with people
- ・ Conversations in short distance と定義している。

少し表現がこの本文と異なるが、"Three Cs"だ。

皆も三密を避けて、感染しない・させないを徹底しよう。

<全訳>

今日本で起っていることは、私たちの白く、無表情で、マスクに覆われた顔一面に書かれている。こんなに多くの人がマスクをつけて歩きまわるとは今まで一度もなかったと言って差し支えないだろう。

このように、私たちは襲い来る病原菌に立ち向かっている。

(マスクを) 病原菌は怖がっているのだろうか。そういうわけでもないようだ。

「自分を守る手段としては、マスクはほとんど役に立たない。」今月の週刊現代にはそう書かれている。医療機関がいうには、商業的な(市販の) マスクなら3~5マイクロメートルの大きさの微粒子を防ぐことができるそうだ。花粉症対策なら、是非つけなさい。しかし、現在猛威をふるっているコロナウイルスは0.1マイクロメートルの大きさである。

なぜマスクが病院の待合室と同じようなのだろうか。その理由は、どちらも誤った安心感を助長するためである。

「最も危険な場所は、コンサート会場でも混雑した通勤電車でもありません。」週刊現代はこう言っている。「それは、病院の待合室なのです。」

このことは理にかなっている。完全に密接で、密閉され、密集した空間はウイルス感染の危険性が高い。まして病人のための施設であれば、その危険性はどれほどであろうか。それにも関わらず、恐ろしいことに、待合室は簡単に先延ばしできる特に重要でない治療に通い続ける外来患者で普段通り混雑していることが、その雑誌によりわかった。

東京のある整形外科病院が良い例だ(内容的には悪い例だが・・・)。ある日の早朝、そこは70人くらいのリハビリ治療の順番を待つ人でいっぱいになっていて、大半は高齢の人だった。

「女性の療法士さんたちがとても優しくてまじめなんです。」71歳の患者はこのように話す。「それに、全額が保険で賄われるから、ここに来ることはほとんど毎日の習慣のようになっているんです。」

もちろん彼はマスクをつけている。皆がマスクをつけている。患者たちは知らないかもしれないが、医者たちはそれがどれほど無意味であるか、知っているに違いない。しかし、4時間もの待ち時間は時間を過ごす心地よい方法としてやりすごされ、普通どおり(病院の) 営業は続いていく。「私にはたくさんのリハ友がいるんです。」その患者は言う。「だから、ここにいと、いつも楽しいのです。」

2018年、全国で18560人の人が病院で抗生物質に耐性のある病原菌により感染した

と、その雑誌に掲載された統計は示している。

マスクを文化的な現象として考えてみよう。そうすることによって医学的な観点(から考える)よりもその(←マスクの)本当の意味に迫れるかもしれない、と阪南大学の心理学者、吉川茂は言っている。彼の意見は、二月に朝日新聞が「マスク依存社会」というタイトルのもと掲載した特集記事の一部だ。吉川は、「顔無し社会」という別の名前も提唱している。

風邪やインフルエンザ、花粉症への防御として始まり、マスクは徐々に習慣のようになった。それ無しでは、私たちは裸であるように感じてしまう。一日の間にあなたの顔を見た、数万から数十万にも及ぶかもしれないすべての見知らぬ人を思い浮かべてみなさい。仮に彼らが全く無関心であったとしても、あなたに気まぐれな興味をもつことを選んだ人は誰であっても、やはりあなたの特徴や表情、化粧の状態、加齢や心配事によるしわ、など何でも自由に観察することができる。そして、真実という最も根本的な制限からさえも解放されて、彼または彼女の心の中へ結論を引き出すことができるのだ。それら(←結論)はけしからんのかかもしれないが、その人個人に関する限りでは、それらの結論が「あなた」を作り上げるのだ。だから何だ。別にたいしたことはない。だが、一度考えが定着すると、その気味の悪い影響は振り払い難い。

そういったものがあなたの顔を多くの人にさらすことの危険性なのである。顔無しの方がいい。コロナウイルスに先行するその衝動は、それ(←コロナウイルス)よりも長く続くだろうと、吉川は予測する。それはある意味では無害だが、別の意味ではそうではないと、彼は感じている。

コミュニケーションには言葉のやり取り以外のものがある、と彼は説明している。私たちはお互いの表情を注意深く見て、それらから多くのものを知る。共感や怒り、憐れみ、軽蔑、友情、無関心、用心、嫌悪などの感情は、たしかに目によって生み出され、目で気付くものであるが、口の形によって生み出され、気付くものでもある。微笑んでいるのだろうか、それとも真剣なのだろうか。もし微笑んでいるのなら、どれほどはっきりとなのか、おどおどとなのか。もし真剣なら、どれほど陰しくなのか、安心させるようになるのか。顔無しについて、吉川はこう言っている。「私たちはよりお互いのことを知らなくなっている。人の感情を理解することはますます難しくなっている。私たちはよりお互いに共感しなくなっている。親密な関係はますます親密でなくなっていくかもしれない。」

マスクは「現実世界に移されたインターネットの匿名性」を象徴していると、彼は言う。

したがってこれが「現実世界」で意味するであろうことは、それがインターネット上で意味

することから判断されるかもしれない。このテーマは文藝春秋（4月）に掲載された小説家でエッセイ作家の林真理子と神経科学者の中野信子との対談の核心である。その中でキーワードは、「バッシング」だ。

英語からの借用語とそれが表す気質とのどちらが最初に広まったのか知ることは難しい。ネットの匿名性はバッシングを助長し、強めている。それは私たちをすべての責任から解放する。誰がバッシングされるのか。誰もが潜在的にバッシングされ得るのだ。そして最もされやすいのは、最も匿名性がなく、最も（大衆に）さらさらでいて、最も有名な人たち、つまり、著名人である。

私たちは明日バッシングするためだけに、今日彼らを崇拜しているのだろうか。私たちがここで思い浮かべる三人は俳優でモデルの東出昌大、女優でモデルの唐田えりか、女優で歌手のレベッカ・英里・レイボーン、通称ベッキーである。林と中野はこれらの著名人たちの不倫に対する大衆の反応の激しさに驚く。誰が気かけようか。それが私たちにとって何になるのか。私たち自身の生活は、義憤という贅沢を享受できるほど欠点がないだろうか。

「それは蟻が砂糖の周りに群がっているようなものだ。」と中野は言う。「マスクをつけた人たちがマスクをつけていない人たちに群がっている。」

もしかしたら、私たちは仕方がない（バッシングせずにはいられない）のかもしれない。私たちの社会的な行動を彼女の神経学的なレンズを通して見ると、中野は、脳は私たちの性質を社会的な衝動と反社会的な衝動に分ける矛盾した遺伝の間で板挟みになって、その脳自身と戦争状態にあるのだと考える。私たちの中には、アルギニンバソプレシン（AVP）と呼ばれるDNAのかけらがあり、中野はそれを「不倫遺伝子」と辛辣に呼んでいる。さあ、子どもを作りなさい、事実上それはそう言っているのだ。一夫一婦制は生物学的な美德ではなく、社会的な美德なのである。社会が発達し、それ（社会）とともに道徳と呼ばれる行動規範が発達する以前は、AVPは自由に人間を動かしていた。

なるほど、道徳というのも面白いものだ。結婚は社会の安定性を下から支えている。不倫は結婚をだめにする。したがって、それは社会をだめにする。したがって、あなたの不倫は私にも関わることなのだ。したがって、私があるあなたをバッシングすることで得る快楽は正当な快楽なのだ。それが作り出すドーパミンは私の当然の報酬である。

中野は6歳の子供たちに関する、ある科学的な実験にも言及している。彼らはゲームでずるをする子どもを見せられて、こう言われた。「この子どもはおしおきを受けます。」それからこ

のように尋ねられた。「見たいですか。」

もちろん彼らは見たがった。

「残酷な実験だわ！」林は声をあげた。その通りである。残酷さと美德は奇妙な仲間であるように思われる。しかし、残酷さは恥ずかしがりやだ。美德はそれに自信を与える。それはベールのようだ、あなたはそう言うかもしれない。あるいは、マスクのようだ、とも。